





バルザック全集

6

東京創元社

バルザック全集 第六卷



昭和四十八年六月二十五日 発行

定価 一、八〇〇円

訳者 水野 亮みずの あきる

発行所 (株) 東京創元社

代表者 秋山 孝男

(162) 東京都新宿区新小川町一―一六  
電話 東京〇三二六八―八二三一  
振替 東京 一五五六五

印刷・相馬印刷株式会社  
製本・株式會社 鈴木製本所  
用紙・北越製紙・富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

バルザック全集 第六卷 目次

# 「絶対」の探求

献辞

|     |     |     |    |    |    |   |
|-----|-----|-----|----|----|----|---|
| 七   | 六   | 五   | 四  | 三  | 二  | 一 |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| .   | .   | .   | .  | .  | .  | . |
| 七   | 六   | 五   | 四  | 三  | 二  | 一 |
| 173 | 141 | 101 | 71 | 41 | 31 | 7 |

# 暗黒事件

## 献辞

|           |    |
|-----------|----|
| 警察くやしがる   | 一八 |
| コランタンの返報  | 三六 |
| 帝政時代の政治裁判 | 三六 |
| 結び        | 三六 |
| 解説        | 三七 |

装幀 松田正久



# 「絶対」の探求



ジョゼフィーヌ・ドラノワ夫人（旧姓ドゥーメール）にささぐ

夫人よ、ねがわくばこの作が、わたくしの命よりもさらに長い生命をもちますように。そうすれば、あなたにささげるわたくしの感謝も、かぎりある人の心のきわみをこえて、長く続くことでありましょう。わたくしの感謝が、慈母の情とも申し上げたあなたに、よしまさることも劣らぬことをせつに祈らずにはいられません。かように、作品の生命によって心の生活をのばすことができる。——確実にできると致しましたら、この類を絶する特権は、それをかちえんことに勇みたつ人のあらゆる苦しみ、やわらげるに足りるものでありましょう。ゆえにわたくしは繰り返して申します、——ねがわくはかくてあれかし。

ド・バルザック

フランドルの古い建物は、この国の淳朴な風習に、しごくふさわしい建築であるが、ドゥエーのパリ街に今でもなお残っている一棟の家は、その外観といい、屋内の設備といい、造作といい、他のどんな住居<sup>すまい</sup>よりもいっそう、旧フランドル建築のかかる特徴を保存している。しかし、その邸の描写を試みるまえに、いささかお談義めくけれども、まずもって多少の前おきがあるということを明らかにしておくのが、おそらく作者のがわの利益であろう。なかにはなんにも知らないくせに、やたらに先を読みたがって、そういう準備的な事柄に不服を申したる人もいるが、しかしそれは、そもその原因をへずに感動を、種子なくして花を、懷胎をとらずに子供をほしがるようなものである。かかる手合いにいわせれば、芸術は自然よりもいっそ

う力づくよあらねばならないわけだが、いかに芸術でも、はたしてそれだけの力があるだろうか。

人間生活のさまざまな出来事は、それが公的生活であらうと私生活であらうと、建築とごく密接な関係をたもっている。だから、たいいていの観察家ならば、公共建造物の残骸にもとづいて、または家庭の遺物の調査によって、国家あるいは個人を、ありし姿のままにふたたび建てなおしうるくらいだ。考古学が社会的自然界にたいする関係は、あたかも比較解剖学が有機的自然界にたいする関係のようなものである。魚竜の骨の一片が一つの創造の全部を無言のまま物語るように、一個のモザイクは一社会の全般を表示する。すべては双方から由来し合い、相連絡する。個々の結果から一つの原因にさかのぼることが可能であるように、原因はおのずから結果を推察させる。学者はこうして古代を、微に入り細にわたって復活せしめるのである。

建築に関する描写というものは、それを試みる作者が、勝手な想像でその基本の事実さえ曲げなければ、非常に深い興味を呼びおこすものだが、その理由は疑いもなくここにあるのだと思う。だれしもきびしい推理によれば、かかる描写を過去に結びつけることができるではないか。また人間にとって、過去というものは、不思議に未来と似ているものである。かつてあったことを物語るのは、ほとんどつねに、これからあるであろうことを物語ることはなからうか。要するに、人間の生活がいともまれる場所を写した絵に向えば、人はまずたいていの場合、むなく終った

願望や、心にきざしはじめた望みを、それぞれに思い起すものののだ。心ひそかな意志を裏きつてしまふ現在と、それを実現せしめることのできる未来との比較は、心地よい満足か憂鬱かの、汲めどもつきない泉である。

だから、フランドル人の生活を描いた絵画に向えば、添景や小道具などがうまく描かれている場合、一種の感動におそわれずにはいられないのだ。なぜだろう。たぶんそれは、人間の種々ことなつた生活のなかでも、フランドル人の生活が、人間の變りやすさというものを、じつに手際よく食いとめている生活であるからだと思う。その生活にはいろんなお祭とか家庭的のいろんなつながりとか、無事安樂がいつまでもつづいてゆくことを証明する脂っこい樂な暮しぶりとか、至福にも似た休息とか、そんなものがきまつてついでまわる。だがとりわけ、率直に感動的な幸福の、平穩と單調とがそこにあらわされている。——享樂のほうがいつでも欲望の先廻りをしてしまふから、もう何も望むところがないほど、それほど感動的な幸福なのである。感情のわき返るような動きにたいして、熱情家がいかに高い値をつけるにもせよ、かれはこうした社会の繪姿を、感動なくして眺めることはできない。もののうわべばかり見ている人からは、いかにも氣力がないと非難されるくらい、その社会では心臓の鼓動がよくとのつているのだ。群集というものはたいいてい、いつまでもひとしい度合でつづいていく力よりも、一時にどつとあふれ出す異常な力のほうを好むものである。群集は、変化にとほしい形の

下にかくされた無限の力、というようなものを確認するだけの時間も忍耐も持ち合わせていない。それゆえ、ちょうどミケランジェロや、ピアンカ・カペロや、ド・ラ・ヴァリエール嬢や、ベアト・ヴェンや、パガニーニなどがしたように、生活の流れに運ばれてゆくこの群集の心を動かすためには、偉大な芸術家と同様、情熱は、目的地をはるかに遠く乗りこしてしまふこと以外に、とるべき手段がない。偉大な計画家だけがひとり、決して目的地を乗りこしてはならないと考へ、一点の非の打ちどころもない完成のなかに示された実力、ただそれだけに尊敬を払う。ありとあらゆる作品に深い平靜の趣きを与え、その魅力によつてすぐれた人々の魂をつかむのは、まさしくそとに現われなにかような実力なのである。ところで、本質的に經濟に明るいこのフランドルの人民が採用した生活なるものは、多くの人が市民生活として、また中産階級の生活として夢みる至福の諸條件を、りっぱにみたすものであった。

フランドル人の風習のすべてに、物質の精粹というようなものがあらわされている。英國ふうの安樂は、その色彩にうるおいもなく調子もかたい。ところがフランドルでは、家々のふるびた室内が、やわらかな色やほんとうの朴訥さをもつていて、人の目を喜ばせる。そこには疲勞をともなわない仕事<sup>フレイエンツ</sup>がふくまれている。彼らのパイプは、ナポリ式の無為逸樂<sup>フレイエンツ</sup>のうまい適用をしめしている。そこにはまた、芸術のおだやかな感じ、そのもっとも必要な条件、すなわち忍耐と、芸術創作品を永續させる要素、すなわち良

心とがあらわれている。フランドルの特質はこの二つの言葉のなかにあるのだ、——忍耐と良心。これは詩的情調のゆたかなニュアンスを追いはらって、フランドルの風習をその広い平野のように平凡に、その霧たちこめる空のように冷たくするかのごとく見える。が、そんなことはない。文明はその力を發揮して、そこにあるあらゆるものを、氣候の影響さえ変えてしまった。

もし人が、地球のいろいろ異なった国々の産業を注意して觀察するならば、まず最初にびっくりさせられることは、温帯の生産物がつばら灰褐色をおびているということ、これに反して、目ざめるばかりの美しい色は、熱国の産物の特色をしめしているということだ。風俗は必然的にこの自然法則と一致するはずなのである。かつては本質的に褐色で、変化のない色にそまるよう定められていたフランドル人も、政治上の変遷によって、——すなわち、彼らをブルゴーニュ州人や、スペイン人や、フランス人などに次々と服従せしめたところの、またかれらをしてドイツ人やオランダ人と兄弟の約を結ばしめたところの政治的浮沈によって、持ちまえのすすけた雰囲気、あざやかな色どりをそえる手段を発見したのであった。フランドル人は、スペインから豪華な緋羅紗や、きらびやかな編子や、感じの強い壁掛錦、羽根かざり、マンドリン、礼儀正しい物腰などを受けついで、帆布やレースと引きかえにヴェネチアから持ってきたものは、不思議なガラス細工品で、ついで酒が光りかがやいて、いっそう上等に見えるといった

代物である。オーストリアからは、通俗な諺にしたがえば、一升櫛のなかでも三歩あるくという、鈍重な外交術を残された。東インドとの交易によって、シナの奇妙な発明品や、日本のおどろくべき品物が流れこんだ。しかしながらフランドル人は、すべてを掻きあつめよう、何一つ人には与えまい、すべてに耐えしのぼうとする辛抱づきは人一倍であつたけれども、煙草の発見が彼らの国民的相貌のちりぢりばらばらな特色を、煙草の煙でつなぎあわせるにいたった時期までは、せいぜいヨーロッパの一般貨物依託倉庫ぐらいにしか考えられていなかったのである。煙草の発見以来、領土の分割区分にはおかまいなく、フランドルの人民はパイプとビールによって存在したのであった。

フランドルは絶えず調和をえた行動に出て、征服者ならびに隣人の財宝と思想に同化したあげく、本来はひどく生氣がなくて詩趣にとぼしかったにもかかわらず、独創的な生活と特徴ある習俗とをつくりあげた。しかも、それでいて、卑屈な奴隸根性に汚されたようなところもなかった。

この国の芸術は、ひとえにものの形を写そうとして、あらゆる観念的な分子をはぎとった。だからこの造形的な詩感の本場に、妙案をこらした芝居や、劇的な所作や、史詩抒情詩の思いきった発想や、または音楽的才能などを求めている。だがフランドルは、時間とランブとを要する発明や学究的の討議にとんでいるのである。そこではすべてのものが、現世の享楽という極印をおされている。人はげんに今あるものだけに目をすえ、彼の考えは、生活のいろ

んな要求を満足させるということに、驚くほど細心に傾いているから、どんな作物においても彼の考えは、現実世界のかたに飛びさるようなことはない。この国民がいだく唯一の将来の考えは、政治の調節というようなものであった。その革命的の力は、食卓で気がねなく勝手にふるまいたいということ、わが家の軒下で本当にらくらくとしていたいということ、そういう家庭的の欲望からきているのであった。富というものが呼びさます安楽幸福の感情と独立の精神は、いずれの国よりも早くフランドルにおいて、あの自由の欲求——のちには全ヨーロッパを動かすにいたったあの自由の欲求を生んだのであった。だから、一度思いこんだらテコでも動かない性質や、教育によるねばり強さは、むかし彼らを、権利擁護にかけての恐るべき人間に仕立てたのである。この国民は、何かをもくろむにしろも、中途はんばではうっておくということがない。家だろうが、家具だろうが、堤防だろうが、耕作だろうが、一揆だろうが、おなじことである。したがってまた、自分が手がける仕事は、ひとりじめを守って、他の容喙をゆるさない。レース製造——辛抱のいる農業と、それよりもいっそう辛抱のいる工業であるこのレース製造にしろ、または帆布製造にしろ、親ゆずりの財産同様、世襲である。もし「確乎不動」というようなものを、純粹に人間の形で描きあらわす必要がある場合には、ネーデルランドの人のいい市長の肖像でも選ぶならば、まず真に近いといえるだろう。いままでいくらでもその例があったように、彼はその

ハンザ同盟のためとあれば、ごく平凡に、しずかに死んでゆくことを辞さないのだ。ところで、こうした淳朴な生活の心地よい詩情は、この物語がはじまる時代においてもなお、ドゥエーにあって特徴を守りつづけていた最後の家、——その一つの家の描写のなかに、おのずと見出されるであらう。

ノール県の都市のなかでもドゥエーは、惜しむらくは、もつとも近代化している都市である。そこでは改革的感情がもつともすみやかな征服をとげ、社会の進化を愛する心持が、この上もなくひろがっている。古い建物は日に日に姿をかくし、むかしながらの風俗は影を消してゆく。パリふうの好み、流行、流儀がそこを支配している。そして古くからのフランドル生活で、ドゥエー市民のあいだに残るものといえば、やがてもはや人をもてなすときの親しさと、スペイン伝来の愛想よしと、オランダの富と清潔とにすぎなくなるだろう。煉瓦の家は、白石づくりの邸宅にとつてかわられるだろう。ネーデルランド風にかっこうの典雅な道具も、フランス新流行品の移りかわりのはげしいハイカラ味に、席をゆずることであらう。

ここに物語る事件のおこった家は、パリ街のほぼまなかどころにあつて、ドゥエーでは三百年このかた「クラス屋敷」という名前をもっている。そのむかしヴァン・クラス家はもつとも名高い工匠の家の一つであつた。ネーデルランドが数種の産物に、商業上の覇権をにぎっていたのは、ひとえにこれら工匠のお蔭なのである。クラス家

は親から子、子から孫というふうに長いあいだガンの町で有力な機業者の組合長であった。ガン市の特権を取り上げようとしたカルロス五世に對するこの大きな町の反逆當時、代々のクラース家のなかでも一番金持だった当主は、その反逆の企てにすっかり巻きこまれてしまったので、大事になることを見こし、かつは同志と運命をともにすること余儀なくされて、フランスの庇護のもとにこっそり、妻子や財産を運び出してしまった。それは、皇帝軍が町を取りまく前のことである。機業組合長の用意は正しかった。彼は事実をいえばガン市独立の擁護者であったにもかかわらず、反逆を企てた暴徒なる名のもとに降服者の列からのぞかれて、他の数人の市民と同じように絞刑に処せられた。クラースとその同志の死は、実をむすんだ。ずっとあとになって、スペイン王カルロス五世はこの無益な刑罰と引きかえに、ネーデルランドにおける領土のもっとも広い部分を失うことになった。大地にまかれたあらゆる種子のうち殉難者の流した血は、もっともすみやかな収穫をもたらす種子である。この反逆を親子二代にわたって罰したフエリーペ二世がドゥエーに暴政をしいた時、クラース家はモリナという非常に家柄のいい貴族と姻戚関係を結んで、莫大な財産を守ったのであった。そのころ貧しかったモリナの本家は、そこでずいぶん富裕になって、それまではただ名義上所有していたにすぎなかった、レオン王国のヌールホ伯爵領を買いもどすことができた。

一つ一つ述べてみたところで、べつに面白くもない浮沈

の後、十九世紀にいたってクラース家は、ドゥエーに居を定めたその分家では、ヌールホ伯、バルタザル・クラース・モリナ氏なる人物によって代表されていた。かれはごく簡単に、みずからバルタザル・クラースと呼びならわしていた。無数の織物機械を動かしていたかれの先祖たちが順次に積みあげた巨万の富のうち、バルタザルの手に残されたものは、ドゥエー郡の地所から年々入ってくるかれこれ一万五千フランと、それに家具だけでもべつに一財産となるパリ街の邸であった。レオン王国の所有地はどううなったかという点、それはフランドルのモリナ家と、スペインにとどまっている今一つべつのモリナ家とのあいだの、訴訟の目的物となっていた。レオンのモリナ一族が、勝手にその地所を占有して、クラース家だけが名乗る権利のあるヌールホ伯の称号を冒したのである。しかし、スペイン貴族としてもたいいぶることよりも、ベルギー市民たることの誇りのほうが、はるかに強かった。そこで、戸籍が制定されたさいにバルタザル・クラースは、ガンに聞えた偉大な名声を重んじて、スペイン貴族というボロ切れみないな名をはうり出してしまった。

祖国を追われた人々の家庭には、愛国心が実に強く存在するもので、クラース家の人々も十八世紀の末ごろまで、かれらの伝統や風俗や習慣を、忠実に守りつづけていたくらいである。彼らは純粹にブルジョワの家でない、姻戚関係を結ばなかった。クラース家に花嫁として迎え入れられるためには、その花嫁のがわに相当の数の市助役とか市

長とかがいけないと駄目なのであった。おしまいには、ブリージュや、ガンや、リエージュや、オランダへ妻を探しにいつてまでも、彼らの家のしきたりを守りつづけていくとした。交際する範囲も次第にせばまって、前世紀の末葉には七つか八つの、最高法院の法官をつとめる貴族の家に過ぎられてしまった。そうした貴族の風習とか、深い襲の法服とか、なかばスペイン風の尊大ぶった莊重さとかは、至極クラス家のしきたりにふさわしいものだった。

町の人々はこの名門に、いわば宗教的な尊敬を払っていた。理屈も何もない。ただもう敬いあがめていたのである。クラス家の人々は、確乎たる誠実、けがれなき節義、いつもかわらぬ礼節というようなものによって、この町の年中行事の「巨人」のお祭とおなじくらい、根ぶかい迷信的崇拜の対象となっていた。「クラス屋敷」なる言葉がよくそれをあらわしていた。旧フランドルの精神は、この家のいたるところに息づいていた。中世紀の裕福な市民が建てた地味な家々の典型、——そういうものを、ブルジョワ古美術の愛好家に提供しているのが、この家なのであった。

正面のおもなる装飾は、オーク材の二枚扉の入口であった。扉には五点形に並べた鎖が打ちこんであり、クラス家の人々はそれぞれの扉の中央へ持つて行って、たがい違いにした二本の鎖を、自慢気に彫らせておいた。砂岩で組み上げたこの入口そのものは、上のほうが先のとがった追持<sup>オウチ</sup>になっていて、それが頂上に十字架のついた小さな神龕<sup>カムドール</sup>

をささえていた。そして、しのなかには、紡錘<sup>ツクリ</sup>を巻いている聖女ジュスヴィエーヴの小さな像が安置してあった。扉とずしの手のこんだ細工は、古色蒼然たるものであったけれども、しかし召使がしごく手入れをよくするので、通りすがりの人びともそのこまかな部分まですっかり見分けることができた。で、寄柱<sup>ヨセ</sup>で出来ている扉の樞も、こい鼠色を保っていて、ニスで塗り上げてあるのではないかと思うほど、ピカピカ光っていた。

階下では、入口の両側にそれぞれ、邸のどこの窓ともおなじような、二つのガラス窓があった。装飾のみごとな持送り<sup>モテオリ</sup>が、窓台をささえていた。白い石材の窓枠は、十字架の形をしていた。だから窓は上と下と大きさの違う四つの部分に分れているのである。つまり、その横木が十字架を形づくるにふさわしい高さにおかれてあるため、ガラス窓の下部の二つは、上部の二つのほとんど倍の長さを持っていた。この上部の二つには、十字架の縦子がわかつ二つの追持揃いがのつているので、そのアーチ形によって角をまろく落されていた。二重追持揃いには、装飾として、次第に突き出した三列の煉瓦がついていた。その一つ一つの煉瓦は、雷紋を描くようなあんばいに、交互に約一寸ぐらいつつ突き出したり引っこんだりしているのであった。菱形の小さなガラス板が、赤く塗った非常に細い鉄格子のなかにはめこんであった。

継目を白漆喰で固めた煉瓦壁は、ところどころで、また家の角ごとに、隅石がささえていた。二階には窓が五つあ

った。三階には三つしかなく、さらに屋根部屋では縁を砂岩でかこんだ、仕切りの五つある丸い大きな穴から、光線をとっていた。その穴の位置は、ちょうど大聖堂の正面玄関の上にある菊形窓のように、切妻の描く三角形の破風の中央であった。屋根のてっぺんには、風見にまねて、亜麻を巻いたつむが突っ立っていた。切妻の壁が形づくる大きな三角形の二辺は、階段のように、二階の冠頂までいくつもの段をなしていた。その冠頂のはしにある怪獣の口から雨水が吐き出されて、邸の左右へ流れ落ちるのであった。建物の裾にそってずっと敷きつめた一列の砂岩が、階段の代りになっていた。最後に、入口の両側、窓と窓とのあいだに、太い鉄の帯を巻いた揚戸が通り道にある。これはむかしのしきたりの名残りで、そこから穴倉へ入ってゆくようになっていた。

この正面は、邸の出来たとき以来、年に二度でいねいに拭き掃除をするのであった。継目の漆喰がほんのちよつとでもかけおちると、その穴はさっそく埋めなおされる。パリのどんな貴重な大理石像だって、このガラス窓や窓台や石材ほど、ていねいにはたきを掛けることはない。そんなわけで、家の前面には、少しの毀損のあとも見られなかった。煉瓦が古びてくるために、色こそ黒ずんでいるけれども、この前面はちょうど好事家が珍藏する古い絵や古い本のように、よく保存されていた。そういう絵とか本などは、大気という鐘形器の下で、われわれ人間でさえおびやかされる有害なガスの影響を受けることがなければ、いつ

までも真新しいままに保たれる。フランドルの曇りがちな空、湿気、町が狭いための薄暗さなどは、しばしば、入念な掃除から生まれるせつかくの色艶を弱めたが、また一方からいうと、この邸はそんなふうに磨き上げてあるために、かえって人の目に冷たく物悲しくも映るのであった。ずしの隙間から何か草でも生えていたら、それとも砂岩の透彫りに苔でもむしていたら、詩人はその風情を愛するだろう。できることなら煉瓦の列にひびびでも入っていて、ガラス窓の迫持揃いの下の、それを飾る三重の赤い仕切りのなかに、ツバメが巣でもつくっていたら、と思うだろう。だからして拭き掃除でなかばすりへったようなこの正面は、その仕上げや、一帯の清らかさなどのために、愛想も何もない律義一方な、几帳面すぎて質実一方の外観を呈していた。そこで、この邸と向いあって住家を求めたものが、一個の浪漫家であるならば、早々に引越していってしまうことは請けあいである。

訪問客が、入口の框にそってぶらさがっている鉄細工の呼鈴の紐を引っぱると、そして、なかから出てくる召使が、まんなかに小さな格子のはまっているハネ板をあけると、ハネ板は自然の重みですぐとまた召使の手から離れて、まるで扉が青銅でも出来ているような、陰にこもった重々しい響を立てながら、ふたたびもとのところへ落っこちてしまう。そして、広い石畳の廊下の丸天井や、邸の奥のほうへ、その陰にこもった響がつたわってゆく。大理石模様塗りに上げてあるこの廊下には、こまかな砂がまい



であって、いつきて見てもひんやりしていたが、ここから真四角な広い内庭に出られるようになっていた。緑がかった色の、釉薬をかけた大きな板瓦が、その内庭に敷きつめてあった。左手に当って、麻布置場や厨や召使部屋、右手には薪小屋や石炭倉や物置などがある。部屋の扉やガラス窓や壁などを飾る意匠は、この上もなく清らかに保たれていた。白い壁石がところどころ堅縞になっている赤い壁が、四方から、内庭を取りまいていた。その壁ごとに差しこむ日の光は、内庭でバラ色の反映と色彩にそまって、人の顔を神秘的な美しさに見せたり、ちょっとした建物の細部を、夢幻的な姿に変えたりするのであった。

通りに面して位置しているこの建物と、どこもかもそっくりの第二の家が、内庭の奥にあった。そしてこれは、フランドルではうしろの家 (le quartier de derrière) という名をもっているのだが、ただ家族の住居一方にあてられていた。階下のとっつきの部屋は奥の間で、内庭のがわの二つのガラス窓と、この家とおなじ幅の庭園に面したべつの二つのガラス窓とから、光線をとりにれるようになっていた。ガラスをはめた扉が二つ、向き合って並んでいて、一つは庭園に、一つは内庭に通じていた。そしてよその人でも、入ってくる早々、住居の全体が一目で見わたされ、庭園の奥を一面におおいかくしている木の茂みまで見とおすことのできるようなぐあいに、通りの入口へと通じていた。来客の応接用の前の家、——その三階の部屋々は、お客が泊れるようになっていたが、——そこにはたしかに

美術品や莫大な貴重品が収められていた。が、クラース家の人がどの目にとっても、またその道の人の判断に照らしても、この奥の間を飾っている宝物にまさる品物は、邸のどの部屋にも見あたらなかった。クラース家の生活は二百年の昔からその奥の間で流れてきたのであった。

ガン市の自由のために死んだ、かのクラースは、もし歴史家が彼の事蹟を述べるにあたって、ヴェネチア無敵艦隊に入用だった帆布の製造で、約四万銀マルクという大金を儲けた人物であるという事実をはぶいたならば、しごくうすっぱらな観念しかえられない工匠であるが、このクラースに、ブリージュのヴァン・ホイスムという有名な木彫家の友だちがあった。ヴァン・ホイスムはクラースの財布からなんべん金を引き出したか、数が知れなかった。ガン市民の反逆の少し前のこと、裕福になっていたヴァン・ホイスムは、自分の友だちのために大した黒檀の羽目張りをして、人に知れないようにこっそり彫った。そこには、ビール製造家で一時フランドル王を名のったことのあるアルテヴェルデの一生の、おもな場面があらわされていた。六十枚の羽目板から成り立っているこの壁板は、かれこれ千四百の主要な人物を含んでいて、ヴァン・ホイスム一代の傑作といわれたものである。カルロス五世は、生まれ故郷なるガン市入城の日を期して、反逆の市民を絞首首にするこ

とにきめていたが、市民監視の役目であった一人の隊長は、ヴァン・クラースにむかって、もし自分にヴァン・ホイスムのその作を与えるならば、彼の逃亡を見のがしてやろ